

「震災を通して見ることで、保健師の理念が見えてきた」  
記憶を未来に残すために 映画『1000年後の未来へ』

映画監督・プロデューサー  
**都鳥伸也さん**  
映画撮影・編集・プロデューサー  
**都鳥拓也さん**

●聞き手 逸村弘美 (ライター)



写真：カミヤス セイ

「東日本大震災の被災地の保健師さんたちの証言を記録してほしい」。  
2011 (平成23) 年春、都鳥さんのところにNPO法人公衆衛生看護  
研究所の事務局長・菊地頌子さんから撮影の依頼が入った。「本当に役  
立つものを未来に残さねば」という共通の思いから、都鳥さん兄弟と菊  
地さんの保健師を訪ね歩く旅は始まる。そして、レンズ越しに見えてき  
たのは、何をおいても住民を守るうとする保健師の勇敢な姿だった。

**震災で再確認された  
役場や保健師の重要性**

—この映画は、もともとは長野県にあ  
る保健婦資料館(注1)に収めるための  
記録映像だったそうですね。

**伸也** そうです。映画の中では宮城県  
石巻市、岩手県大槌町、東京電力福島  
第一原子力発電所の事故によって住む  
土地を離れなければならなくなった9  
つの市町村、そして30年以上前に原子  
力発電所の建設を阻止した岩手県田野  
畑村(注2)が出てきますが、実際は30

カ所以上を回りました。話を聞いた保  
健師さんは80人を超え、映像も140  
時間に及びました。どれも貴重な証言  
で、資料にしておくだけではもったい  
ないし、保健師さんの話を聞いている  
うちに「自分は未来のために何が残せ  
るのか」という命題を突きつけられて  
いるような気持ちになって、資料用と  
は別に、映画を作らせてもらうこと  
にしたのです。

**拓也** 一般の方には、保健師という仕  
事があるのだということを知ってもら  
うきっかけになればいいと思います

**PROFILE** ●とどり・しんや●  
●とどり・たくや●

1982年岩手県北上市生まれ。拓也が双子の兄、伸  
也が弟。2004年、日本映画学校卒業後、映画監督・  
武重邦夫の主宰する『Takeshigeスーパー・スタッ  
フプログラム』に参加。『いのちの作法』(小池征人  
監督・2008年第82回キネマ旬報文化映画ベスト  
テン第4位)、『葦牙』(小池征人監督)をプロデュ  
ースする。『希望のシグナル』では、伸也が監督、拓也  
が企画・製作・撮影に。命をテーマにした地域密着型  
の作風が注目されている。

し、これから保健師を目指す人には指  
針になればと思います。すでに保健師  
だけれども、デスクワークばかりで本  
来の姿がおぼろげになってきてしまっ  
た人たちは、この映画を題材に勉強会  
を開いてもらうのもいいかも知れな  
い。映像には、逆境の中で、あらため  
て自分の仕事に誇りを持って活動して  
いる保健師さんがたくさん出てきま

す。「こういう保健師を目指そう」という保健師さんの理念を描いた映画になっていると思います。

—30力以上を回ったことで、見えてきたものはありますか。

**伸也** 一番大きなことは、「被災」という事柄を通して、そこから「保健師とは何か」が浮き彫りになったという印象がありました。インタビューでよく聞いたのが「保健師をやっている良かった」という言葉です。避難所で、住民に最初に声をかけるのも保健師さんだし、住民が知っている行政側の人にも保健師さん。だからこそ、真っ先に文句も言われるし、頼られもする。避難所のトイレの問題から、お産の立ち会い、中には「保健師だから分かるでしょう」と遺体の確認までやった人もいます。被災の経験を通して「自分たちの役割を再確認しました」と言う保健師さんが多かったですね。

でもみんな当時の記憶がない。それほど大変な苦労をされたのでしょうか。役場を失うと、航空母艦を失った戦闘機のように帰るところがなく、戸惑ってしまうのです。

**拓也** 福島はまったく問題の質が違います。原発事故の後、ヨウ素剤を飲ませるか飲ませないかの判断から、全村避

師さんが多かったですね。

**拓也** 最近では地域にあまり足を運ばない若い世代の保健師さんが増えた中でこういうことが起きたので、地域を知っていることの大切さを実感されたようです。

—各地域のお話で、印象に残ったことは何でしょうか。

**伸也** 被災の状況やレベルによって、保健師さんの動きも場所ごとに違いました。例えば、石巻市だと広すぎて状況を把握するのも大変だし、行政側の意見をまとめるのも難しい。となると、みんなが独立独歩で、自分で考えて動くということが現実には必要とされました。大槌町の場合は町役場が津波の被害に遭い、町長や管理職の方が多く

難、放射能の汚染問題など、とてもデリケートで複雑なことがたくさんありました。

**伸也** すごく変だなと思ったのは、立ち入り禁止地区の前に行ったときです。検問の脇ではコンビニが開いて、普通に暮らしている。でも、一歩先は立ち入りもできない無人の地域。ここで区切ることの意味はなんだろうと不思議な気持ちになりました。放射能汚染のホットスポットになっていて小学校も訪ね、線量計で数値を測りましたが、手を上げて測ると下げて測るのでは数値がぜんぜん違うのです。空気の問題ですから、「ここからここまで」と何かを線引きすることは現実には難しいですね。

「忘れない」「絆」「つながり」を「過性のブームにしない」

**伸也** 「忘れない」「絆」「つながり」



亡くなり、若い人だけが残された。住民台帳も流され、機能麻痺に陥ってしまいました。反対に七ヶ浜町は役場が山の上にあつて無事だったので指揮が取りやすく、対処が比較的スムーズな印象を受けました。役場が機能していることがいかに重要かを感じました。陸前高田市はほとんど全部が無くなったような状態で、インタビューという言葉がブームになったけれど、現実はどうかと思う。今も東北エリアでは、被災地の状況を伝えるテレビ番組が毎週木曜日に流れていますが、東北以外では流れていません。その番組の中で、東北の人は全国に放送されていると思って、一生懸命メッセージを出しているのです。その姿を見ると涙が出そうになります。ほかの地域では、むしろ必死に日常に戻ろうと、震災を忘れようとしているようにさえ感じます。

—震災当時、全国から保健師さんが集まって活動していたと思いますが、現在もつながりがあるのでしょうか。

**伸也** ごく一部を除き、少なくなっていると思います。菊地さんがよく取材の中で「支援に来ていた保健師はどうだったか」という質問をしていましたが、多かったのが「お邪魔します」と



お客さんのように来て、一週間もしないで帰っていくという人も中にはいたという話です。来た人の質問攻めに貴重な時間を割いて答えて、教えて、引き継ぎもなくすぐ帰る……の繰り返しで、現地の保健師さんはその管理がとでも大変だったようです。あるいは、被災状況を見て精神的にやられてしまい、具合が悪くなる保健師さんがいたとか。手伝いに来るのだから、それなりに準備して来なければなりません。でも、菊地さんは「そういう欠点の洗い出しが大事なんだよ。次に役立つから」と、言っていました。

もちろん現地の保健師さんと支援に来た保健師さんの連携がうまくいったところは、素晴らしい効果を上げていたようです。大植町には、元・大植町の保健師だった鈴木るり子先生の呼びかけで、全国から延べ500人以上の保健師が集まりました(注3)。農家の作業小屋を借りて寝袋で合宿しながら、

ら、全戸訪問や住民の相談にのつたのですが、その活動も、現地の保健師さんを助けるように考えて動いた。例えば、現地の保健師さんが休む時間帯にお手伝いの人たちが代わりに動くとかです。

僕たちと菊地さんが各地の話を聞いて得た結論は、「緊急事態の支援には、腕利きの本当のスペシャリストを送らないとダメだ」ということです。緊急の現場では1から10まで教えている時間がないですから。そして、「十分な準備を持つて、最低一週間は滞在すること。」

**拓也** 映画の最後に菊地さんたちが勉強会を開いて、テントの張り方を覚えているシーンがあるのは、その意味なのです。何にもない場所に支援に行くときは、寝場所も自分で作らなくちゃならない。

## 全国初の「乳児死亡率0」の 沢内村との出会い

—おふたりはよく地元密着型の映像作家といわれています。

**拓也** 確かに僕たちは地域に密着した作品を作るので、よく「地元を愛しているんですね」といわれるのですが、日本映画学校に入るために神奈川県川崎市に移るまでは、地元をあまり好きではありませんでした。

**伸也** だから逆に「もつとここがこうなってほしい」とか、あるいは問題の部分が見えるのです。よく友達と「北上をよくするならこうだよな」と、話し合っていました。高校生なりに地元の魅力探しをしていたわけです。好きになれなかった地元を好きになりましたというこどだったのかもしれない。

**拓也** そんなときに出会ったのが、全国初の老人医療費無料化、乳児死亡率0を達成した沢内村(現〓西和賀町)だったのです(注4)。

**伸也** この出会いも不思議なものだったのですが、たまたま東京に出てきたときに、路面に晒した古本屋の棚にある『村長ありき——沢内村 深沢晟雄の生涯』という本が目に入ったのです。手にとってみると、自分が知らなかったスゴイことが書いてある。これはみんなに広めなければと思いました。それで映画『いのちの作法』の企画をしたわけです。

**拓也** 当時はホリエモンが騒がれていて、世間がお金、お金でうるさかった。僕らの世代はバブル期のツケを背負わされて育ってきたので、金中心の価値観にうんざりしているのです。そんなときに沢内村と出会って、すごく共鳴

**伸也** 経験で得たことを、知っただけで放置せずに、次に生かせるように準備、勉強しておくことが大切だと思うのです。今回の震災でも、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震を経験した保健師さんや民間団体の人の動きや意見が役立つと聞きました。その人たちが今回に生かしたと言っています。

**拓也** 震災経験者は「この時期はこういう物資が必要で、これを過ぎたらこの物資が必要」など、流れもよく分るのですね。やっぱりこうして、経験が蓄積されて少しずつでも確実に前進しているのだということも分かりました。

**伸也** 経験や反省から、自分は何を始めるのか。映画を見て、それを考えてもらえたらと思います。

できるものを感じました。命を守ることは、一番根源的な誰でも守らなきゃいけないこと。それを豪雪で、貧乏で、何にもない村が全国で最初に「生まれてから死ぬまで」を守り抜いたというのは、本当にすごいことだと思う。マインナスをプラスにしてしまう力に感動しました。

**伸也** それで『いのちの作法』を作るときに、地元の方や保健師さんたち、

### 『いのちの作法』

—沢内「生命行政」を継ぐ者たち—

(2008年)

<http://inochi-film.main.jp/>

監督：小池征人 製作総指揮：武重邦夫 企画・プロデューサー：都鳥拓也・都鳥伸也／老人医療費無償化、乳児死亡率0を日本で最初に達成した岩手県沢内村。現在は、湯田町と合併して西和賀町となったが、今もいのちを大切に「生命尊重の理念」が息づいている。地域で共に生きる人々の姿に、無形の豊かさを感じる作品。

今回の映画でもお世話になった菊地さんと知り合うことになったのです。全部 沢内村からつながっているのです。

—映画作りの一作目から、ずっと「命」を見つめるテーマですね。

**伸也** 自分の母親が看護師で、父親が接骨院の院長、そして僕らも早産で生まれ、子どものころはぜんそくがひどくて、小学校になかなか通えない時期もあったというのにも影響しているかもしれない。

**拓也** 例えば、ぜんそくで医者にかかるにしても、数秒しか見ない、顔も見えないような医者もいる。子どもながらに、「適当にされているな」と分かるわけです。そういうことに触れながら育ってきたので、命の現場に目がいくでしょう。

また、「生きる」ということを考え

**伸也** そうです。このままでは、日本は末端（地方）からダメになると思います。体に例えると手足の毛細血管が詰まって、壊死していくような感じですね。だからこれからは、地方でも選択肢を増やす活動をする必要があると思うのです。従来の東京が発信地で地方がそれを受ける一方通行の形ではなく、47都道府県からそれぞれに発信するものがあり、それぞれに受けるものがある形にする。それが日本全体を元気にする唯一の方法なんじゃないかと思えます。それを考えて、僕らは地元密着型の作品を作るし、スタッフも地元の人でできる限り作るようにしています。

**拓也** 地元に残る人をいかに育てるかというのが課題でしょう。そのためには種をまいて、ゆっくりゆっくり育てることをやっていかないといけない。今の時代は、みんなが即効性を求めて

たときに、僕らの世代は生きる目標みたいなものが持てなくなっている。まず、社会に関心がない人が増えているのですが、それは社会に対するあきらめでもないのです。あきらめるというのは、その前に夢を持っている状態があるから、あきらめるわけでしょう。そうではない。その前の夢も何にもないんです。カラッポなんです。

**伸也** でも東京の子は違う。学生時代も友達に「都鳥は夢がない。やれることは何でもあるじゃないか」と言われたのです。なんで話が噛み合わないのか考えてみたら、東京には選択肢がたくさんある。選択肢がたくさんあるということ、可能性がたくさんあるということ、夢も生きる目標も増えてくる。

**拓也** 可能性を求める人は都会に出るしかない。結果、地元の過疎化が進む。

しまい、育てるということをしないから良い結果が出ない。今の社会の逆をやらないと、本当の意味の土台作りができないと思います。

**伸也** 僕たちの映画作りも、東京に出てやったらいろんな話が早いに決まっている。でも地元でやることで、みんなが笑顔になったり、一緒に盛り上がったたりできるのがいいと思うのです。また、自分たちが映画を作ることによって、そこから地元新しい動き

田舎には「人生そんなもんだ」という、夢や目標のない人が増えていく。そこから離婚、ひとり親、児童虐待……と悪循環になっていくように思います。

—地域格差の根本は、選択肢の格差によるのかもしれないと。



が生まれることもうれしい。自分だけが誉められるのではなく、みんなで達成感を共有できるのがいいな、と思うのです。

—秋田県の自殺対策の取り組みを中心に作られた映画『希望のシグナル』の中に、「無駄なつながりが大事」という言葉があり、印象に残りました。

**伸也** 今の時代の人間関係は、仕事は仕事の人と、趣味は趣味の人と分けた

『葦牙—あしかび—  
子どもが拓く未来』(2009年)  
<http://www.kazesoy.com/>

監督：小池征人 製作総指揮：武重邦夫  
企画・プロデューサー：都鳥拓也・都鳥伸也／岩手県盛岡市にある児童養護施設「みちのくみどり学園」に在籍する7割の子どもが被虐待児。モザイクなしで彼らの顔を映すことで心の表情を見せ、問題の深さと子どもの生きる力のすごさを伝えている。

# 1000年後の未来へ

## —3・11 保健師たちの証言—

<http://311hokenshi.main.jp/>

監督：都鳥伸也 企画・製作：都鳥拓也、都鳥伸也 撮影：都鳥拓也、山内大堂、猪本太久磨  
製作・配給 有限会社ロンプラン 映像メディア事業部



東日本大震災から私たちは何を学び、  
日本の未来へ何を残せるのか？  
いよいよ公開！

### 劇場公開

3月15日(土)～3月28日(金) 10:30 (1日一回上映)

東京都渋谷区 アップリンク <http://www.uplink.co.jp/movie/2014/21720>  
【特別鑑賞券】1,000円 【当日】一般1,500円、学生1,300円 (平日1,000円)、小・中・シニア・障害者・UPLINK会員1,000円 【水曜サービスデー】一律1,000円

3月22日(土)～3月28日(金) 11:00 / 15:05 (1日2回上映) ※続映調整中

大阪市十三本町 シアターセブン <http://www.theater-seven.com/index.html>  
【前売】1,000円 【当日】一般1,500円、専門・大学生1,300円、中・高・シニア・会員1,000円

### 上映会

- 3月15日(土) 岩手・北上市文化交流センター  
【前売】1,000円 【当日】1,200円 お問合せ 0197-67-0714 (ロンプラン)
- 3月21日(金・祝) 岩手・盛岡市  
【前売】1,000円 【当日】1,200円 お問合せ 0197-67-0714 (ロンプラン) 090-6257-9251 (盛岡担当：打田内)

全国150カ所での上映を目指し、上映会を主催してくださる方々を募集しています！  
お問い合わせは ▶ 03-3511-7030 (イメージ・サテライト)

### 『希望のシグナル 自殺防止最前線からの提言』 (2012年)

<http://ksignal-cinema.main.jp/>

監督：都鳥伸也 撮影・編集：都鳥拓也 企画：都鳥拓也・都鳥伸也・打田内裕子 / 都鳥伸也の初監督作品。自殺率の高い秋田県で行われている民間団体の自殺対策を1年間記録している。行政まかせではなく、住民や当事者たちが手探りながらも考え、集まり、動かしていくさまに、未来の希望を見出すことができる。



れていて、なんでもないとときにお茶飲んで話をするような仲間がいない。なんでも無駄がなさ過ぎる。そのことが人生を生きづらくしているとも思います。無駄なつながりって、とつても大事だと思えますね。

拓也 無駄なつながりがたくさんあれば、自殺まで追い込まれないと思うし、震災のようなときにも支えになるかもしれない。実際に、震災でよく助けてくれたのは、姉妹都市を結んでいた先だったという話も多く聞きました。日

ごろはそんなに交流はなくても、何かのときに助けになる。  
選択肢を増やすこと、無駄なつながりを増やすことが、より良く生きることにつながるのではないかと思いません。

—おふたりの作品は、過去を記録した内容ではなく、今活動している人や、未来に向けてどうするかということ伝えるスタイルですね。

拓也・伸也 未来に向けて何を

かが一番大事だと思っているのです。東北の人はよく「(現地に)来て、感じてくれるだけでいい」「忘れないでいてくれたらいい」と言いますが、それは優しすぎる言葉だと思わないです。実際は、それだけでは良くないでしょう。  
ぜひ、映画を観ていただき、みなさんそれぞれの場所のできることを始めてもらえたらと思います。

注1：2001(平成13)年に長野県穂高町(現=安曇野市)に開館。自治体に働く保健婦のつどい(現=全国保健師活動研究会)の会員が中心となってつくった。  
注2：1981年(昭和56)年に岩手県田野畑村明戸地区に原発計画が持ち込まれるが、元保健師・岩見ヒサさんの熱心な活動により中止になった。このことが岩手県に原発がない理由のひとつにあげられている。  
注3：村嶋幸代さん(東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻地域看護分野教授=当時)、鈴木るり子さん(元=大槌町保健師、岩手看護短期大学地域看護学教授)が呼び掛け、全国から延べ555人の保健師が集まった。平成23年4月22日～5月8日の期間で3728件の家庭訪問、5082人の相談を行った。  
注4：岩手県沢内村(現=西和賀町)は、昭和30年代に豪雪・貧困・多病多死の三重苦を乗り越え、全国初の老人医療費の無料化と乳児死亡率0を達成した。